

知能の診断

(下)

村山貞雄

9 知能検査の形式と信頼度

知能検査で幼児の知能程度を診断したばあい、どれくらい信頼度があるだろうか。

現在、或る人は相当高く評価するが、そうかと思うと、きわめて低くみる人もいる。知能検査の信頼度について考えるべきは、まず考えられることは、知能検査の形式にかんする問題である。

知能検査の形式にかんするおもな問題として、個人検査と団体検査の信頼度の問題と、

第一表 団体検査と個人検査の相関

比較された個人検査	相関係数	備考
WISC知能診断検査法	.64	東京都幼稚園5.6才
鈴木ビニー式知能検査法(仮称)	.37	東京都幼稚園5.6才
田中ビニー式知能検査法	.72	東京都幼稚園5.6才
点数式田中個別知能検査法	.39	東京都幼稚園5.6才
乳幼児精神発達検査	.46	東京都幼稚園5.6才

(注)調査人員はすべて30人ずつである。

すべて東京都内の幼稚園56歳児におこなった。

作業検査と言語検査の信頼度の問題があるが、今回は前者について述べよう。

A 団体知能検査と個人知能検査の相関

団体検査の一例として、村山式幼児用知能検査をとり上げて、幼児の団体検査と個人検査の相関関係をしらべたところ、第一表のように高かった。

この結果だけによれば、両者の相関はあまり高くない。

B 幼児に団体知能検査をおこなうことの可否

幼児に団体検査をおこなうことは、数年前までは考えられないことであった。現在でも幼児にたいして団体検査は無理であると主張する人が少なくない。たとえば、ある保育の教科書では、幼児の団体検査をまったく否定している。

幼児に団体検査をおこなうことが無理であるかどうかをしらべる一助として、十人の臨床心理学者に、つぎの三項目についてたずね、三つのうちのいずれかに解答を依頼したところ、第二表のような結果を得た。

団体検査を幼児におこなうことが無理であるとすれば、その原因をみるために、すなわ

第三表 団体検査の可否

項目	人数
一、幼児に団体知能検査をおこなうこととは無理である。	五名
二、幼児に団体知能検査をおこなうことは無理でない。	三名
三、その他	二名

ち、幼児におこなった団体検査の信頼度が低い原因をみると、昭和二十八年に現行団体検査について調査したところ、つきの内容が考えられた。

一、幼児が友達の答をカணニングする。また、逆に答を友達に教えてやる。

二、団体的にやる一斉作業にのらない子どもがいる。

三、幼児期と小学校低学年と併用できるようになつた検査には、幼児に無理な内容や方法のものが多い。

四、作業が幼児にとって困難なものがある。

五、例(練習問題)をあげて、他もこれと同様にやりなさいといつても、例とそれらの問題の関係がわからぬ。

六、一対一であつたら励まして続行させら

れるような問題でも、団体検査では忍耐心のない者はやめてしまう。

七、幼児の知識の内容がせまいので、一部の幼児には分らないような絵がでてくる。

八、優秀な子どもでも時間制限検査にはまったくかからない子どもがいる。

九、むずかしい問題の中には、児童期の常識を必要とするものがある。

そこで、筆者は、これらの欠点を克服するよ

うな団体検査ができるいかということを考

えて、一つの知能検査をつくってみたが、そ

の短所や長所については、今後の調査にまつ

ところが大きい。(『幼児の教育』昭和三十年保育学会大会特集号、峯文閣発行「村山式幼児用知能検査」参照)

C 幼児用団体検査による知能値の低下

団体検査でつぎに問題になるのは、幼児は団体検査をすると損をするのではないかといふことである。

団体検査は団体的な施行法によって標準化

されているのであるから、この心配は一応杞憂であるといえよう。

しかし、団体検査はつねに同人数の団体に

たいしておこなうものではなく、生活年齢や子どもの性格・能力によって、人数を多少加減するのが普通であるから、このことからも団体的に損をするということが實際おこつてくる。

ところで、このように人数を加減する目的は、もしつねに同人数で検査をすれば正確な知能値をだすことが不可能なことがおこるので、できるだけ個人検査の結果に近い知能値をだすためである。ゆえに、団体知能検査は、団体的な施行によるハンディキャップをできるだけ少なくしつつ、多くの人に検査をしようという立場に立つてゐることになる。

すなわち、標準化は団体的におこなわれてゐるから、平均値からみれば平等であるといえるが、個人的には多少の損をする人もでるという事実を頭にいれて、しかも、このような事実をできるだけ防止しようとしているわけであり、団体知能検査によって一般的に知能値が低くなるということはないが、知能値が低くなる子どもがあるといえる。

それでは、団体検査によつて、知能値が低くでやすい幼児はあるといえる。

しかし、団体検査はつねに同人数の団体に

第三表 団体検査で低く出る幼児

順位	幼児の特徴	人数
1	自我意識が強い 自己中心的である 我がままである	10
2	社会性がない 陰性的性格で孤独型である 友達に好かれないと	8
3	気が小さい 気が弱い	7
4	いたずらである わん白である 乱暴である	5
5	すぐ泣く	5
6	よくしゃべる 自分の思うことをどんどん言う	5
7	甘ったれである	5
8	よくふざける 調子にのる	4
9	動作がのろい	4
10	おちつきがない	3
11	興奮しやすい 情緒が不安定である	2
12	弱視である	1
13	左利きである	1
14	新しいものごとになじむのに時間がかかる	1

第四表 団体検査で高く出る幼児

1	社会性がある 友達に早くなれて誰とでも よく遊ぶ 多勢できるときはなんでも よくできる比較的仲良く活潑 に遊ぶ	9
2	おちつきがない	5
3	神経質である 凡帳面である	5
4	気が小さい 気が弱い	4
5	はずかしがる はにかみやである	3
6	体力が弱い	3
7	卑怯である	3
8	返事をしないでにやにやしている	1
9	強情である	1

団体知能検査で知能値が低くなる子どもがあることは、団体知能検査の信頼度をさげるものであるが、知能検査で、幼稚園や保育所における幼児の現在の学習能力を知ろうとす

る。たとえば、知能は高いように思えるが皆育所における保育全体の効果が低いことがある。たとえば、この表にあるよ

うな子どもは、個人検査をおこなつたばあい、かえって知能値が低くでてしまうという

これをしらべるために、愛育幼稚園、白金保育園その他の幼児について、団体検査(村山式)を施行した結果と個人検査(鈴木ビネー式)を施行した結果と個人検査(鈴木ビネー式)を施行した結果をくらべて、知能指数が二十以上さがっている幼児の特徴を調査した。その結果は、第三表のようになり、社会性のない者、気の小さな者、いたずらで検査にのらないう者などが団体検査の結果が低くでている。

るばあいは、団体検査もかえって有効な点がある。
すなわち、小学校は勿論、幼稚園、保育所でも集団的な形式で學習することが多く、団体検査で高い結果がでる者は、個人検査でよい結果のでる者よりも、幼稚園や保育所における保育全体の効果が高いことがあり、一方、団体検査で低い結果がでる者は、幼稚園や保

しかも、団体知能検査のやり方は、むしろ団体的な學習のうちではもつとも個人差に気をつけておこなわれる部類に属している。
なお参考までに、個人検査にくらべて団体検査の結果知能指数が二十以上あがっている幼児についてしらべたところ、第四表のようになに、社会性のある子ども、はにかみ屋の子どもも、一対一の対人態度に欠陥のある子どもなどがある。

ことがいえる。このことは、現行個人検査による知能診断法にたいする一つの批判となるであろう。

10 幼児期の検査の信頼度

A 幼児期と児童期の知能指数の相関係数

知能検査の結果が子どもの成長によって変わらないかということが、しばしば問題になります。外国ではターマンその他の人々による調査があり、わが国でも狩野氏その他の人々による研究がある。

諸調査の結果は、幼児期におこなった知能検査の知能値は、児童期以後にはかなり変化がみられるとする考え方がある。

この調査として、多田淑子氏の協力を得て、四十六名の幼児について、子どもが四歳〇か月から五歳十一か月までのあいだに第一回目の検査をおこない、七歳〇か月から九歳十一か月までのあいだに第二回目の検査をおこなって、その間の変化をしらべた。(検査はともに鈴木ビネー式を使った。)なお、第一回の検査と再検査の間隔の平均は二年二・二か月である。

この結果、幼児期と児童期の知能指数の相

関係数 r は〇・六五であった。この結果は、相関関係がそんなに低いとはいえない。

B 幼児期と児童期の知能指数の動搖

また、知能指数が幼児期と児童期では、どちらくらい揺れがあるかということをしらべるために、両者のひらきをしらべたところ、ひらきの平均は約八になつた。この結果からす

〔第五表〕 再検査と知能指数のひらき

IQ	N	ひらき	
		\bar{x}	σ
130以上	7	12.71	12.33
129~80	31	8.87	7.11
79以下	8	3.25	1.20
全 体	46	8.42	7.74

〔第六表〕 再検査と知能指数の差

1回目のIQ	N	差	
		\bar{x}	σ
130以上	7	-8.14	15.72
129~80	31	+4.10	10.60
79以下	8	-0.25	3.46
全 体	46	+1.50	11.47

しては、知能指数が一・五があつただけで、幼児期も児童期も大体おなじであつたが、知能指数が非常に高い子どもは、児童期になると、幾分知能指数がさがる(知能指数が小さくなる)傾向があった。(第六表参照)

11 知能検査の施行条件による信頼度

知能指数の恒常性にかんする問題は、幼児の成長について考えられるだけでなく、児童期と児童期のあいだの知能指数の動搖は比較的小さいといえども、そのときの心身の条件についても考えられる。

もし幼児の心身の条件によって、知能検査の結果がいちじるしく動搖するものであつたら、児童期になるのを待つまでもなく、翌日やつても、かなり違つた知能値が出るかもわからない。もし、これが事実であれば、幼児の知能検査は信頼性がいちじるしくさがることになる。

C 幼児

期と児童

A 午後に幼児に知能検査をおこなう問題

幼児の心身の条件のうち、もっとも代表的なものとして、施行時間にかんして午前と午後の問題がある。

なお、この調査で全体と

この調査として、二十名の幼児後期の子どもについて、一日の時刻を変えて知能検査

(鈴木ビネー式)をおこなつてみた。すなはち、このうち十人(Aグループ)は、午前九時から十時までのあいだに第一回目の検査をおこない、それから十日後の午後三時から四時までのあいだに第二回目の検査をおこなつた。その他の十人(Bグループ)は、第一回

約二にすぎなかつた。

しかし、実際には、幼児が午後幼稚園から帰つた後や帰る途中に来て検査したばあいにおこないかと心配されることがしばしばおこつては、疲れている様子がみえ、検査をしながら、このために知能値がさがつて出るのは

よう、午前では明瞭にあらわれぬ欠点が午後にはあらわれることがあり、或る種の子どもには、時間的なハンディキャップが考えられる。

B 検査室で幼児に知能検査をおこなう問題における時刻の問題とともに、場所の問題がある。

すなはち、母親のなかには「そんなことができなかつたのですか。うちではよく言えるのに」とか「家ではするのですが、よそではしないのですよ」などといふことをいう者がいる。

これらの言葉は、筆者もはじめのうちは母親の偏見のように思つてゐたが、母親がこのように言つた五人の幼児について実際にしらべてみたところ、そのほとんどが事実であつた。

このことについて調べる補助手段として、

母親にたいして日本保育学会式幼児発達検査の知的発達の問題をわたして、幼児の家庭の状態について解答をしてもらつた後、知能検査(鈴木ビネー式)をおこなつた。

この結果は、第七表のようになり、午前施行したばあいと午後施行したばあいに、差は

第七表 施行時間と知能指数

Aグループ	第一回 午 前	第二回 午 後	差
	109	115	+ 6
B	117	139	+ 22
C	107	123	+ 16
D	117	122	- 5
E	122	117	- 5
F	118	110	- 8
G	123	124	+ 1
H	117	108	- 9
I	148	148	0
J	107	105	- 2
平均	118.5	121.1	+ 2.6

Bグループ	第一回 午 後	第二回 午 前	差
	112	119	+ 7
B	88	87	- 1
C	116	119	+ 3
D	152	154	+ 2
E	113	111	- 2
F	122	125	+ 3
G	104	101	- 3
H	116	107	- 9
I	118	120	+ 2
J	105	110	+ 5
平均	114.6	115.3	+ 0.7

目の検査を午後二時から三時までのあいだにおこない、第二回目の検査をそれから十日後の午前九時から十時までのあいだにおこなつた。(すべて鈴木ビネー式検査を用いた)

なお、午後にテスト問題を放棄しようとする態度の強い子どもは、午前来たときも、やっぱりそのような態度がうかがわれるが、励ましてもるとやつて来る子どもが多い。こう

いう。特に三歳台児には午後の検査でさがる者がめだつた。

母親にたいして日本保育学会式幼児発達検査の知的発達の問題をわたして、幼児の家庭の状態について解答をしてもらつた後、知能検査(鈴木ビネー式)をおこなつた。

この結果は、第七表のようになり、午前施行したばあいと午後施行したばあいに、差は

さういふ結果、両者より割合率「よ」・玉山で

第九表 家庭生活の観察と知能検査
(出生順位)

出生順位	人数	家庭生活の観察 —知能検査
一番	13	-1.07
二番	17	+9.47
三番	10	-5.20
四番	2	+8.50

第八表 家庭生活の観察と知能検査
(母親の学歴)

母親の学歴	人数	家庭生活の観察 —知能検査
小学校	3	-5.00
中学	27	+6.00
専門	8	+5.88
大学	8	-2.88

あつた。日本保育学会の検査は、かららずしも知能のみをみようとするものでなく、知識や常識を相当含んでいるから、この調査の結果の解釈はやや複雑であるが、勝手な行動をする幼児、気の散りやすい幼児、あきやすい幼児など、母親による幼児の家庭生活の観察の結果よりも、検査室におけるテストの結果が低く、子供はどのよう成長していくか、又どのように育てていかねばならないか、

なお、この調査で、母親の歴史についてしらべたところ、第8表のようになり、小学校を出ただけの母親は、人数はわずかである。

母の順位と有意差はなかった。(第九表参照)

（筆者は愛育研究所員）

保育（新刊紹介）

かであったが、検査の結果よりも子どもをよく見る傾向がうかがわれた。(また大学を出した母親にもおなじ傾向があらわれたが、これは、幼児が家庭における教育や文化財に多くの貴重な体験から著者は子供の代弁されて知識や常識が発達していることも一つの原因であろう。母親の理想が高いことも一つの原因かもしれない。)

また、同胞中の順位をしらべたが、有意差はなかった。(第九表参照)

（著者は愛育研究所員）

本書を通読し、その特徴ともいえる「幼児教育の現場にある者として必要な予備知識、例えば幼児の身体的発育の状態や精神的発達の状態を、指導の実際的な面と関連づけた所」ここに本書の価値を見出すが、最後に最も心に残るもの。

それは、本書の全面に、活字の一つ一つに著者の人間味豊かな温かく、大きく、広く深い「愛」の溢れているこ

とである。

書名 保育

著者　お茶の水女大教授同附

及川　ふみ

A5判　上製二二〇頁三二〇円

発行所　光生館